

2006本州の山岳トイレ状況等と北海道への展望

小枝 正人（山のトイレを考える会）

1. はじめに

2006年度を振り返ると、山岳トイレ問題については、本州主要山岳地域において、環境配慮型山岳トイレの整備（設置）が進み、ゆっくりと着実に問題改善へ向かって進んでいると感じられる。特に日本を象徴する山、富士山では2006年度で静岡県側、山梨県側の登山道の全ての山小屋に環境配慮型山岳トイレ整備（設置）が完了した。

山岳トイレ整備（設置）が完了した山域では、これからは、「ソフトの問題」：整備（設置）された山岳トイレの性能発揮に関することと、長期に渡る適正な維持管理について関心を持ち続けていかなければならない。

一方、本州に比べて原始性が豊かであるがゆえに通年の営業小屋が無い北海道では、遅々として環境配慮型山岳トイレの整備は進まない。しかし、本州と同じにならないからと悲しむことはない。北海道がゆえの山域に合った山岳トイレ問題改善を目指していけば良いのだと考える。

おりしも大雪山国立公園管理計画改訂のための検討会が設置され審議中である。山岳トイレ問題も含めて大雪山国立公園のこれからのあるべき姿が議論されており、パブリックコメントが募集中であり、大いに関心をもっていく必要がある。これらの観点から北海道への展望に思いを馳せてみたい。

2. 本州での「山岳トイレ改善」の状況

1) 2006年度山岳トイレ整備

本州の山岳トイレ問題の改善は、過去の「第5回、第6回、第7回山のトイレを考えるフォーラム資料集」で紹介したように、先進的な山小屋経営者（槍ヶ岳山荘・穂苅氏ほか）による個別の努力によって始められ、その後、環境省や先進的な県（富山県、神奈川県、静岡県、岩手県等）などの行政による支援のもと整備が進んできた。

国・環境省による山岳トイレ整備の支援は、通称三位一体改革により2005年度から大きく変わった。地方分権（地方が出来るものは地方に任せ）を重視し、国と地方が一体になって推進すべき分野について前向きに取り組むよう補助金改革がなされた。国立公園については補助金を廃止し、国の直轄事業として整備を実施する方向となってきた。国定公園については補助金を交付金化して地方（都道府県）の裁量性を高め、独自に施策を実施できる方向となった。

ただ、「山岳環境等浄化・安全対策事業費補助制度」（通称：山岳トイレ補助制度）；民間団体（山小屋事業者等）又は地方公共団体等に、事業費の1/2補助を行う制度は運用されているようで、2005年度に整備完了した静岡県側に続いて、この補助を適用して2006年度では富士山・山梨県側登山道（富士吉田口）の山小屋トイレの整備が完了した。

これら三位一体改革後の補助金制度廃止、国立公園内では原則国直轄事業、国定公園

内では交付金による都道府県事業によるという方向性により、山岳環境問題改善がどのように進んでいくかは、今後数年間、注意深く観察していく必要がある。三位一体改革後の傾向である国立公園(例えば大雪山国立公園内)は国(環境省)直轄となったから地方自治体(例えば道)は関与しないという傾向になり易いからである。

しかし、過去にも紹介したように、自治体(都道府県)によっては首長の方針、関係部局の施策により積極的に山岳環境問題改善に取り組んでいるところはある。過去の紹介と何回も重複するが再度紹介する。富山県は「環境立県」を標榜し「富山県快適トイレ推進プラン」を策定して、山岳地の公衆トイレや山小屋のトイレ整備にも積極的に取り組んでいるし、岩手県や新潟県は山岳避難小屋への「エコトイレ」整備を積極的に進めている。神奈川県では丹沢山域の環境問題に積極的に取り組んでいる。静岡県は富士山の山岳環境トイレ問題を短期間で整備完了させ、2006年度は継続する維持管理の問題改善を行う為の音頭をとっている。これらの地方自治体では「山岳環境問題」への取り組み施策が可能であるのに、「観光立県」をめざす北海道では、なぜ難しいのか。私達が応援するためにはどんなことが出来るかを考えていかなければならない。

Web上で具体的に興味(上手く稼働しているのだろうか、何か問題はないのだろうか、維持管理はどうしているのだろうか等)を引く近年整備された山岳トイレには、次のようなものがある。鳥海山・滝の小屋(山形県)公衆トイレ(バイオトイレ)、薬師岳・太郎兵衛平(富山県)公衆トイレ(土壌処理循環型)、飯豊連峰避難小屋トイレ(新潟県胎内市)(バイオトイレ)、北アルプス・涸沢公衆トイレ(環境省直轄)(尿へり搬出・尿土壌処理)。いずれ稼働状況を調査したいものである。

2) 富士山における山小屋トイレ整備状況

世界に紹介されてしまった「トレットパーによる白い山肌」問題が発端になった富士山の山小屋トイレは、短期間(5年間)で環境配慮型山岳トイレに整備(設置)された。富士山の登山道(静岡県、山梨県所轄、国直轄山頂)沿いの整備必要山小屋は、2006年度末迄に全て環境配慮型トイレへと整備完了したのである。本フォーラム資料集にも静岡県自然保護室・森下さんから「富士山のトイレ整備と維持管理について」が掲載紹介されている。山梨県観光資源課・川元さんから提供頂いた「トイレ整備山小屋配置図(山梨県側)」と共に参考として頂きたい。

富士山に整備(設置)された環境配慮型山岳トイレの方式は数種類にのぼる。(一種類だけではない)。整備(設置)採用される場所の事情、特性に合わせて方式が選定されている。富士山では乱気流の関係によりヘリコプター搬出方式は採用されていない。

採用されている主なトイレの形式は次のようなものである。バイオ式(オガクズ)トイレ、浄化循環式(かき殻充填式)、燃焼式、土壌式である。静岡県側登山道にはバイオ式(オガクズ)トイレの実績が多いが、山梨県側登山道ではバイオトイレは無く、浄化循環式(かき殻充填式)と燃焼式が多い。その傾向については若干興味深い。

これら富士山トイレ整備についての詳しい情報発信は、静岡県が熱心である。大いに評価したい。Web(インターネット)上にて検索(次のURLを参照)することが出来、山小屋トイレ

整備の状況(H14年度～H17年度最終年度)や現在の富士山トイレ、富士山トイレマップ(静岡県版)などを検索することが出来る。ぜひ、山梨県他の自治体も富士山に限らず整備した環境配慮型トイレの実態、維持管理状況などを、公表、情報発信してもらいたいと希望している。

富士山トイレ整備 ; <http://kankyou.pref.shizuoka.jp/shizen/fujisanpage/toile/>

3. 利用者負担(自己負担)と山岳トイレ維持費用

最近の世の中の情勢では、利用者負担(自己負担)の考え方は当然のものとして語られることが多く、登山者として例外ではありえない。登山者側の意識も、その負担要求の理由が明確であり納得できれば、「利用者負担(自己負担)」は「当然として認める」傾向にある。

比較的古くから自然公園への入場利用の際に協力を金を徴収し活用している雨竜沼湿原(雨竜町)の場合と自然環境厳しい山岳トイレ;南アルプス・北岳バイオトイレの協力金(チップ代)について紹介したい。

1) 雨竜沼湿原における環境美化等協力金について

暑寒別天売焼尻国定公園にある雨竜沼湿原は北海道最大の山岳型高層湿原であり、暑寒別岳の登山ルートでもある。雨竜沼湿原・暑寒別岳への登山口は「雨竜沼湿原ゲートパーク」として整備され、南暑寒荘、キャンプ場、駐車場、水洗トイレ等の設備がある。

雨竜町産業建設課農地商工グループ殿から提供頂いた環境美化等協力金についての情報を、表1・表2に示す。

表1 雨竜沼湿原入込客数推移

年度	雨竜沼湿原 入込者数:人	環境美化協力金 納入者数:人	協力金 納入額:円
H14	16,710	12,078	2,847,200
H15	17,733	13,367	3,095,500
H16	13,104	8,959	5,040,852
H17	9,193	6,623	3,678,714
H18	12,246	8,704	4,833,564

※入込客数は子供から大人までの全体の人数

※環境美化等協力金は大学生以上が対象

※協力金納入額はキャンプ場使用料、南暑寒荘使用料含む

※H17年度に納入された環境美化等協力金はH18年度雨竜沼湿原ゲートパーク整備事業に充当

表2 平成18年度雨竜沼湿原ゲートパーク整備事業

H18年度 整備事業項目内訳	費用 円
雨竜沼湿原環境保全費	973,000
登山道維持費	733,000
ゲートパーク施設等管理清掃費	4,029,000
水洗トイレ維持費	419,000
水道施設維持費	173,000
発電施設維持費	1,344,000
計	7,671,000

2) 南アルプス・北岳バイオトイレの維持費用等

南アルプス・北岳は日本第二の高峰(標高 3192m)であり、日本百名山として登山者に大変人気が高い山である。主に利用される主要登山ルートの一つが大樺沢二俣から八本歯

のコールへ一気に上がるコースである。この大樺沢の環境保全対策として山梨県と芦安村（当時）の英断によって、平成 11 年度に二俣公衆トイレ（大樺沢仮設トイレ・杉チップバイオトイレ）が運用開始となり、稜線上の環境保全対策として平成 13 年度から北岳山荘横に北岳公衆トイレ（北岳山荘バイオトイレ・杉チップバイオトイレ）が運用開始となった。「北岳公衆トイレ運営委員会」殿；（連絡先）南アルプス市農林商工部観光商工課（事務局）より提供を頂いた公衆トイレの維持費用等について、表 3・表 4 に示す。

表 3 二俣公衆トイレ（大樺沢仮設トイレ）運用状況

年 度	利用者 数：人	チップ代 円	平均 チップ代	経費総計 円	設置費 円	運搬費 円	燃料費 円	雑費 円	清掃委託 費：円
H14	4,329	76,656	18	3,470,000	2,500,000	721,000	160,000	8,000	81,000
H15	2,487	111,669	45	3,682,992	2,625,000	810,075	157,761	9,156	81,000
H16	2,516	62,413	25	3,679,320	2,520,000	829,164	186,000	9,156	135,000
H17	3,959	135,288	34	3,996,245	2,520,000	972,300	348,800	5,145	150,000
H18	4,488	108,858	24	4,095,881	2,520,000	1,001,700	416,600	7,581	150,000

※公衆トイレ（杉チップ式バイオトイレ）は、2基を毎年設置、撤去する。（雪崩のルートの為）

※標高 2,209m に位置し、車道は無いため全てヘリコプターによる輸送となる。トイレは 2 基。

※二俣公衆トイレについては、設置費にトイレリース料（杉チップ含む）を含む。

※日常の維持管理は近隣にある山小屋（南アルプス市白根御池小屋：NPO 法人芦安ファンクラブ 指定管理）が行っている。

表 4 北岳公衆トイレ（北岳バイオトイレ）運用状況

年 度	利用者 数：人	チップ代 円	平均チ ップ代	経費総計 円	維持管理 費：円	運搬費 円	燃料費 円	雑費 円	清掃委託 費：円
H14	27,631	613,722	22	2,300,000	680,000	1,000,000	350,000	0	270,000
H15	12,377	277,271	22	5,129,178	3,147,690	1,234,485	470,703	6,300	270,000
H16	14,138	356,767	25	2,250,055	345,280	1,076,775	558,000	0	270,000
H17	22,563	286,493	13	4,127,764	1,524,664	1,325,625	943,800	45,675	288,000
H18	19,619	308,645	16	4,589,964	1,639,209	1,464,750	1,179,000	19,005	288,000

※北岳公衆トイレは常設であり、その維持管理は隣接する市営山梨県北岳山荘による。トイレ 15 基

※杉チップは 2, 3 年に一度交換している。使用済み杉チップは事業ゴミとして広域清掃センターで処理。

※常設のため、越冬時における湿気や結露からの精密機器保護が課題となっている。標高 2,900m。

※この 2 施設の運営経費については、チップ代及び県、市、北岳山荘の負担金収入による。

4. 山岳環境問題議論の基礎となる登山者数データの重要性

1) 登山者数データの重要性

過去のフォーラム資料集（第 4 回、第 5 回、第 6 回、第 7 回）にも記載したが、「何年も継続した登山者数のデータ、日変動も含めたデータ」の重要性は、今日ますます重みを増して

いる。本州も含め、北海道の山岳環境問題でもオーバーユース論、収容力論、ROS議論等が研究される時に、基礎となる登山者数データが重要だとの認識はが広がり、それらを得るための研究、調査(モニタリング)が実施されるようになってきた。

本年も、継続した経年変動登山者数というデータの重要性を訴えている「風の便り工房」の佐藤文彦氏より提供された資料を、表5 大雪山系登山者数経年変化 に示す。

黒岳は漸減傾向にあり、赤岳(銀泉台)は横ばいか若干漸増傾向、白雲岳避難小屋は横ばい傾向、トムラウシ短縮登山口は漸増傾向にあるように見える。

また、北海道十勝支庁による大雪山ヒサゴ沼避難小屋(日本百名山 トムラウシ山の最寄り避難小屋)の利用者数の調査が行われている。これら調査データは、Web(インターネット)上に公表されており、大雪山の山岳環境問題解決への基礎データとして利用される重要な価値がある。

URL <http://www.tokachi.pref.hokkaido.lg.jp/ts/kks/index> の中に、H16 年度ヒサゴ地区登山者利用実態調査報告書、H17 年度ヒサゴ地区登山者利用実態調査結果(概要)の情報が公開掲載されている。ぜひ目を通して頂きたい。

2) 美瑛富士避難小屋・野営地及びトムラウシ南沼野営地での登山者データ

私達が署名活動を行って実現を願っている美瑛富士避難小屋のトイレ設置では、具体的なトイレ方式検討(携帯トイレ方式も含め)を行う際に、必ず避難小屋宿泊者・野営地宿泊者・小屋通過者(トイレ利用可能者)のデータ(生データそのものでなくても信頼性の高い推定データ)が必要になる。国・環境省は国立公園内の直轄整備検討の前段階として、まず H19 年度には適切なモニタリング(赤外線カウンター設置及び避難小屋内の宿泊者数把握対処など)を行うことを必ず実施して欲しいし、すべきである。

次にくる将来のトムラウシ南沼野営指定地のトイレ問題への布石
美瑛富士避難小屋のトイレ問題解決のおりには、次に北海道の山岳環境問題の本命である「トムラウシ南沼野営指定地のトイレ問題」が待っている。山のトイレを考える会が発足した7年前から変わらぬ懸案事項である。あまりにも、基本的な部分で登山界や関係者の間で意見が分かれ(会の中でも集約されていない)ており具体的に踏み出すのがためらわれている問題である(まさか、携帯トイレブース1基が設置されていることで問題解決がなされたとの幻想はないと思うが...)

このトムラウシ南沼野営指定地のトイレ問題にこそ、事前の準備のデータ収集;モニタリング(以下登山者データ収集をモニタリングと称する)が最も重要だと考える。トムラウシ南沼野営指定地がかかえるモニタリングの難しさは、登山道に赤外線カウンターを設置して調査しただけでは全体像データは把握しきれない(不足である)点にある。もちろん十勝側ルートからの通過者、ヒサゴ側ルート(山頂経由含む)からの通過者、トムラウシ温泉側からの通過者(日帰り含む)の動向も重要な因子である。これらは赤外線カウンターで捕捉することは可能であるが、野営指定地テント泊者の動向については、野営指定地に同様にテント宿泊して調査することが必須だからである。

国・環境省は、ぜひ予算化してこの困難なモニタリングを委託実施して欲しい。受ける側は、北海道の登山界をあげて協力して応える姿勢を示すことが出来れば良いのにな

一と願っている。

5. 北海道の山岳トイレ問題

北海道に目を転じた時、環境配慮型山岳トイレについては黒岳バイオトイレ能力不足問題を避けては通れない。ある識者達は、バイオトイレは失敗だったと評価しがちであるが、それは一面からの見方であると補足説明したい欲求が出てくる。しかし、本当に成功したバイオトイレとなるには、本州等で得られた知見・成功体験をキチンと反映した改善がなされた上で、初めて胸を張った北海道大雪山の財産となるのである。このままの小さな対症療法で良い訳がない。バイオトイレは北海道(旭川)発の誇れる技術であるのだから。

1) 大雪山黒岳のバイオトイレ能力不足

北海道で初めての環境配慮型山岳トイレとして、多くの登山者等に期待され、利用されて、本格稼働開始3シーズン目が過ぎた。一般の登山者には一見、不具合など感じられず稼働している黒岳バイオトイレも、設置者、維持管理側からは大がかりな改善の必要性を迫られている。

今では、その原因も改善策も整理されてきたようである。過去数年のフォーラム資料集にも関連内容が掲載されているし、本年の資料集内容にも参考となる報文の掲載がある。

定量的なデータを含む理論的説明資料は、環境省・環境技術実証モデル事業(山岳トイレ技術分野)の富山県・立山・大汝休憩所でのコンポスト処理方式(バイオトイレ・おがくず)の実証技術報告で公表された内容から明らかである。また、富士山の静岡県側登山道山小屋の数カ所で採用され稼働している改良型同方式での実績・評判。新潟県飯豊連峰避難小屋で採用されている実績・評判等からも改善策は明確となっている。

「黒岳バイオトイレが抱えている問題」(昨年のフォーラム資料でも記述)

①尿の量が便に比べて多く、蒸発熱量(電気等)が不足し、おがくず媒体が湿潤、本来のバイオ(微生物)分解の能力発揮出来ていない。

→富士山や他の山域でのバイオトイレで最近採用されだした固液分離型(尿を分ける)の方式への改造が必要である。

②必要電気容量の確保困難(必要電気容量がソーラ、風力、発電機でまだ不足)。

→燃料を使用した発電機を主としてでも必要電気の確保命題。風力などは自然エネルギーを使用しているデモンストレーションの役目だけの気休めであり、大雪山のような過酷な気象条件では故障・破損修理ばかりの費用がかかり無駄である。

③そもそも処理対象人数の調査・見積不足により、必要な登山者の人数に比して小さい能力の規模を設置したことの反省。1基当たりの処理能力アップの型式変更かトイレ数の増設が必要となる。性能発注方式を採用しなかったことによる責任不明。

→登山者数(負荷変動、最大人数設計思想)をキチンと事前に調査が必要だったことが痛いほど検証された。しかし事前調査でも1日最大使用人数は500人の可能性の情報があった訳で、現在、説明によく使われる利用者200人想定予測(平均)のところに1日最大800人のピーク日の利用があるのでオーバーユースであるとの趣旨は、問題

の本質をずらすものだと言える。バイオトイレ方式での必要処理能力(人数)は、1シーズンの1日平均利用人数ではなく1日最大使用人数の大きさを設置しなければならないことは周知のことである。登山者のオーバーユースのせいではない。黒岳の登山者数データは長期的にはゆっくりと漸減傾向にある。

2) 携帯トイレ利用の普及と考え方

携帯トイレは徐々に知られるようになり、携行する登山者(トイレあるところでも使用するかどうかにかかわらず)も少しずつ多くなる傾向が見られる(トイレデーでのヒアリング等からの感触)。しかし、一般的傾向として、そうだからと言って、大局的に見てその山域が「携帯トイレ使用」だけで、登山者の一般廃棄物(し尿)問題に対処しきれんかどうかの詳細検討・事前予測評価を放棄して良い訳ではない。全体像を俯瞰して「携帯トイレ」で可能だという根拠は何か?利尻山や早池峰山で携帯トイレが成功しつつある条件と同じことが整っているのか?運用主体に、利用定着の為に根気強く広報や労力をかける熱意があるか?など冷静で詳細な定量的な検討が必要である。

山岳トイレ設置にはいろいろな点(例えば維持管理費用の問題、維持管理受け者が事前に確定しない事、その他の事情など)で困難さが予想される時、往々にして「携帯トイレ」で対応する山域とする旨、設定しがちである。それは「自分たちは何もしない」と宣言しているだけの話しである。山岳環境問題の一つである山岳トイレ問題を「自己責任として登山者自身が携帯トイレを使用して対応すればいいんだ」との乱暴な意見で切って捨てる施策では、問題改善の方向へは決して進まないと考える。

①携帯トイレ使用時は時間がかかる。使用時はブースや身を隠す場所が必要。

自身で使ってみれば良く判ることだが、トイレを使用するに比べて倍以上の時間がかかる。人はトイレ使用を欲してから待ち時間には限度がある。一般の避難小屋トイレ数2基を考えれば、携帯トイレ主体ならトイレブースは4基必要である。ましてや悪天候・雨の中での携帯トイレ使用は、ブース無しでは苦行である。

②男性の小便と女性の小便とでは携帯トイレ使用時の周囲状況が異なる。

③使用済みの携帯トイレ回収システムが無ければ定着しない仕組みである。遠方からの登山者に使用済みの携帯トイレを自宅まで持ち帰れとか、登山口のトイレに使用中身を開けて捨てるとか言うのは、使ったことのない人のたわ言である。自分がやっても出来ることで、なおかつ長期的に無理なく継続していけることで、はじめて成り立っていく仕組みとなるのである。使用済み携帯トイレを回収する自治体は、一般廃棄物処理の焼却施設が完備している必要がある。使用済み携帯トイレを焼却する施設を持たない自治体のエリア(登山口)では採用が出来ない仕組みである。

④携帯トイレは、トイレが無いところで用を足す人が高山植生へ立ち入り破壊している状況を防止する効果を求めて使用するものではない。そのような役にはたたない。大雪山国立公園管理計画改訂版に記載してある携帯トイレの使用目的が誤って解釈されることのないように表現に注意する必要があると考える。

3) 大雪山国立公園の山上部の避難小屋付帯トイレ(公衆トイレ)の重要性

三位一体改革と称する変化で、国立公園内での山岳トイレ整備は、これまでと変わり環境省直轄事業となった。しかし既に存在する大雪山の各避難小屋付帯トイレは北海道の所轄事業であり、管理(十数年に一度のヘリ搬出等)の所轄も道が行うようである。では、国・環境省は大雪山国立公園内の避難小屋付帯トイレや歩道付帯施設としてのトイレ整備について、具体的にはどこの箇所を所轄するのだろうか。

大雪山国立公園管理計画改訂版では、既存の避難小屋付帯トイレのことを次のように述べている。「今後、公衆トイレの位置及び処理方法等について検討する。」

つまり、現状の白雲岳避難小屋や忠別や上ホロやヒサゴ沼避難小屋付帯トイレである貯留浸透式(ボタン式トイレ)の評価については明確に述べていないのである。

筆者などは、現状トイレは山岳環境汚染防止に大いに役立っていると評価している。三十数年前は白雲岳避難小屋には付帯トイレが無かったのである。トイレが無いことと比べれば雲泥の差である。現状の貯留浸透式(ボタン式トイレ)からの浸透汚水が周囲の植生に悪影響を与えているとの有意の差が出ている訳でもない。

また、日常維持管理負担は付帯トイレ設置有無さえも左右する重要性を持つが、既存避難小屋付帯トイレの日常管理(汚れた時の日々の清掃等)については、登山者自身が行っていると言えるのではないだろうか。もちろん、十数年に一度、ヘリで内容物を搬出する費用がかかる(H12年度に白雲岳と忠別岳避難小屋付帯トイレ2箇所です業費合計5,200千円を道が拠出)が、本州の各自治体ではどこも同様に責任を果たしている。また、黒岳バイオトイレに比べれば維持費用負担はずっと少ない。

それよりも、付帯トイレ設置管理者が行うべきは、便槽からの搬出物の大半をビニールやティッシュや生理用品等ゴミが占めないようにする為に、登山者側に広報することであり、その重要性を現地で周知できる手段を講ずることである。多くの登山者は理由が判れば協力してくれる。便槽にゴミを投棄することがどれだけ迷惑をかけることか、トイレ紙を持ち帰ることが山岳環境保全にどれだけ貢献することなのか知らないだけである。知っている我々の役目は、効果的な広報をし、情報を伝え、地道に協力者を増やすことである。「山のトイレを考える会」では、過年度から懸案であった大雪山避難小屋付帯トイレのドアの外側に注意銘板を取り付けることをH19年度に活動の中で実施する予定である。

大雪山国立公園内の国・環境省直轄事業となった付帯トイレ整備は、美瑛富士避難小屋の付帯トイレが該当しそうである。ただ、大雪山国立公園管理計画改訂版での美瑛富士避難小屋の該当箇所の表現は次のような記載である。「公衆トイレについては、工法及び維持管理等を含めた環境条件が整った上で検討するものとする。」他の避難小屋の箇所と異なる論調のこの文面を読むと、なんだか何もしない条件をわざわざ明記したように勘ぐりたくなるような気になるが、誤解だろうか。ぜひ、「・・・維持管理等を含めて検討するものとする。」であって欲しい。維持管理は登山者が行える工法とすることも含めての検討も希望して...

以上

表5 大雪山系登山者数の経年変化

	H5年	H6年	H7年	H8年	H9年	H10年	H11年	H12年	H13年	H14年	H15年	H16年	H17年	H18年
黒岳(七合目)	46,097	44,944	43,783	42,562	42,818	42,510	38,202	36,730	33,820	34,324	34,903	33,282	25,857	27,592
黒岳石室(泊)	—	—	—	—	—	—	—	—	1,379	1,428	1,285	1,259	1,150	
赤岳(銀泉台)	15,077	13,853	16,039	15,142	16,609	15,509	15,677	14,514	12,937	16,044	18,862	20,149	17,752	18,392
緑岳(高原口)	—	—	—	—	4,242	3,188	3,958	4,758	3,394	2,223	2,500	3,405	3,298	4,111
高原温泉沼コース	—	—	8,984	8,631	10,704	9,237	8,030	10,389	11,433	14,810	20,310	19,670	14,000	11,111
白雲岳小屋泊	—	—	1,532	1,551	1,812	1,425	1,367	1,476	1,399	1,163	1,310	1,289	1,249	1,358
白雲岳テント泊	—	—	1,811	1,820	1,958	—	—	1,614	1,543	1,223	1,563	1,357	1,162	860
旭岳山麓駅										5,167	2,426	2,770	979	5,935
旭岳山頂駅										8,935	3,416	5,498	6,973	7,138
旭岳登山口										695	1,088	3,195	1,970	5,099
沼の原(クちゃん)	1,713	1,858	2,537	1,849	1,998	2,224	1,719	1,460	1,339	1,150	1,721	1,251	1,012	1,079
ユニ石狩	531	531	710	814	1,029	1,098	1,193	856	1,175	1,081	740	698	993	914
愛山溪登山口	—	—	—	5,287	5,191	3,476	2,754	1,823	3,152	3,005	2,963	3,726	2,483	2,283
雲井ヶ原										1,335	677	1,189	546	598
トムワン(短縮)	—	—	—	549	651	214	1,666	1,630	1,520	—	2,646	2,783	2,362	2,591
十勝岳(望岳)	—	—	—	—	15,475	28,162	15,667	13,929	—	—	—	—	—	
富良野岳/三段山	—	—	—	—	15,474	17,360	16,695	13,929	10,539	12,021	9,802	11,464	11,811	9,736
ニペソツ山								574				794	795	574
石狩岳(シュイター)												239	218	321

データは、「風の便り工房」：佐藤文彦氏による。登山口の登山届け集計による。